



乃日海
坤

中村俊定文庫
文庫 18
753
2





冬好日注解坤

浪花 黄萃庵升六著



あしは津より火焼家と
すきまのわら

先考のものをいつまうと云うは 重五

万葉集三巻は人言火焼家考四録有己我妻古方常
記 人言 此を記書とて出せり対ての句は
昔火焼家のすけとてつたあきあきすきまのわら
つらきつらきわらすけとてつたあきあきすきまのわら
あきあきすけとてつたあきあきすきまのわら

越向まめつ〜〜〜山居りりり〜讀唐の柏子木を

〜〜〜

名 蘇馬骨のやねのつら〜 杜國

けり〜〜〜に手書を〜〜〜〜〜に初めの作り〜
き〜〜〜〜〜先初乃五文字の花後と夏季のもの
を性〜〜〜〜〜夫なひり〜〜〜を也〜〜〜る男力
を〜〜〜曲〜〜〜を〜〜〜る言由百白の中〜〜〜も
平白〜〜〜〜〜に才この位〜〜〜り〜〜〜り
〜〜〜〜〜骨のやねと作り〜〜〜け白の手書〜〜〜
〜〜〜のこ〜〜〜〜〜九の〜〜〜の漢〜〜〜木悉く
骨〜〜〜ハ骨を〜〜〜〜〜骨のやね〜〜〜り
〜〜〜〜〜限り〜〜〜のす〜〜〜〜〜り〜〜〜

を〜〜〜〜手書〜〜〜幻術〜〜〜
字の才〜〜〜 第三文字の〜〜〜化つ〜〜
顔字の才〜〜〜〜〜傳授〜〜〜
〜〜山〜〜〜杜の〜〜〜字一名の扱を坐
居り〜〜〜と傳〜〜〜とやまを二字五字〜〜
傳〜〜〜も字の才〜〜〜乃手書〜〜
字の時を杜〜〜〜ハ〜〜〜の手柄〜〜
〜〜〜切〜〜〜已の傷の脚もあ〜〜
〜〜の〜〜の〜〜〜と作〜〜
〜〜〜字の才〜〜〜〜〜
〜〜〜才〜〜〜〜〜故〜
詩經 七月在野 八月在宇 九月在戸 十月入我 杜下美

実をけりて振るうのうらうねもさきと良実小功考の仕業
あつて

持入るやうの月けりすうあは 野水

そまうつりりしてさ夜を寤さるのせ垣ともんか
しりこそくにさあさる骨のまるとま冷まきき体を仙境
ともさゆり色して持入るよ作りてん函ふ林和結の伴
をほのめつせさあつて

風吹ぬ村乃日瓶了酒ちのま日 芭蕉

けりの上をたの持入るるとさうり持りあつてくはあつてんれ
ともさあ夜をさる容を附りてん函こしらふ詞の白ひり瓶
の酒さきよ作りてん月とらあみ秋乃日と附りてん日並
のりあつててさ縁ともさゆりて初らの感のりあつてんは

と丁寧小まうりける白まらう風淋しをうくは家の路七
秋のいとありねさるるに瓶子酒さるうく忙然と作持り
あつてゆりあつててさ小人のあつて理されとも持入るうら
百葉の老翁ともさゆりのあをりりしとんきさる作者乃手
振ちりて

新穢るゆきな市小振まゆ風 羽笠

あつて酒さるるとさうりあつてあつてのさまらとさひとをて彼兼
好うあつてあつてゆきな新穢て世さるるよさうりてさ
あつてあつてさ合さるゆきな振作りてすなはまひりてまを
あつてあつて附りて新穢の花のまら市小あつてさるハ
市所小遊園あつてさあをあつてあつてさるるよさうりて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

は附をとおししうしし糸糸解年の事ありしとて例の子昭二位
あり木うししはなす少の事なき解年の事ありしとて好し
附るるこしとてまの事ありしとて糸糸は解年或は嫁に介の
一門我もししとていふありて娘りしき糸糸家あり解年ハ何
ゆへ糸糸の事とて解年ありしきとてさうして糸糸の娘り
しはせひしきとて糸糸を中として姑のつうひきも糸糸を
しとていししとて糸糸は糸糸川の討つる人し

糸糸と糸糸の事ありしとて糸糸 野水

糸糸解年ありしきとて糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて
糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて
糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて
糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて
糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて

て人糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて
糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて
糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて
糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて
糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて

糸糸と糸糸の事ありしとて糸糸 杜國

糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて
糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて
糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて
糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて
糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて糸糸の事ありしとて

うらやまをうらやましくして 恥ぢたを驚きしも 敵のあつたに
あつて 我身のしくしもの合をうらやましくして 驚くうらやましくして 万葉集
源氏の入に巡る鴨すゝたみ藤のうらやましくして ねえよ ね
鴨すゝたみ 我身のうらやまをうらやましくして

火をうらやましくして 驚きたる人を 芭蕉

是四季の附りして 泥乃ほろり 雨篠空をくくろりの小水作して
うらやましくして 驚きたる人の体もろり 火をうらやましくして 巨燧とらふ小水乃
志いす 雨すまひんせり されしもろり 巨燧小水友のお
うらやましくして 驚きたる人の体もろり 火をうらやましくして 故人を等
居る老の才の佳しきと 命は白かふあつたものろり

門守の翁よ 氏中子うらやましくして 重五

とらふとらんしとらふをうらやましくして 附りて 雨の秋もろり 九主も

雨をうらやましくして 先のしうらやましくして 終ふ已うらやましくして のろり
あつて 雨の由縁をうらやましくして 番人の門守もろり かくれ居
体と福と ねえろり 一世の苦のうらやましくして 雨のうらやましくして 火
をうらやましくして 驚きたる人の体もろり 雨のうらやましくして

血刀のうらやましくして 雨の 荷守

命をうらやましくして 驚きたる人の体もろり 雨のうらやましくして 一腕のま
あつて 雨のうらやましくして 驚きたる人の体もろり 雨のうらやましくして 血刀
のうらやましくして 驚きたる人の体もろり 雨のうらやましくして 或は
徒士のうらやましくして 驚きたる人の体もろり 雨のうらやましくして 果
居るうらやましくして 驚きたる人の体もろり 雨のうらやましくして

雨のうらやましくして 本郷の 杜國

あつて 雨のうらやましくして 驚きたる人の体もろり 雨のうらやましくして

の中にもなつていゝまゝに武家志望の多くして志すも人氣の荒
きふまゝにあらはれし其の場をいん定てゐるし句に圓うら折
らるる時分ちりてゝ一 考下りては月ひくくきふりて
アヤして陸セツきくハ血刀隠すりけりこの執事せん

冬やうり納豆とてくちりてし 野水

冬やうり納豆とてくちりてし野水
冬やうり納豆とてくちりてし野水
作りて秋季の終る待の一字は持てるおまゝに
当季より素一なる句ちりてうり振を附る故人の句作
を味あへ

花はほく桜の徴とすくはり 芭蕉

花はほく桜の徴とすくはり芭蕉
花はほく桜の徴とすくはり芭蕉
左ハ芳句の納豆とてくちりて人の位を定めしけり
と接するトて去の句りてて去季にうりされうりて扱け句

まわらうりて解るる一先桜の徴とすくはり
韻會曰徴支韻敗切徴也カヒ説文物中久雨
而青黒也キちりては徴の衣の徴と敗切ちりて衣乃やれり
一 貌げらるる一是ををてくちりてを解せんとする次の句
の傍にのいりて敗ををのむトソあるより照一合せてんは
月ひくくは執事とてうりて是刻五欲六花の境をまねうり
さるりのうりてはくちりて業障の嫌るる一と悟りては考
の考欲を接てを為のたハ人とのまゝにやれりん 両りのか
花とちりて人乃すまゝのまゝにちりては桜の咎めをとり
さるり考一はくちりてと蛇とちりて人もあまらるるは
注一ハ痛也のちりてちりては利のちりては俗被官袴の
垢をまゝとちりては桜の徴と接するは作するのちりて

室方かーこくトーして下小君常のちん人そどのをさあていなりー
くはそこのとくぬ叙と虚は作らる例のちの好とりあー

八十季むとこり入る吉母とて 野水

ける先八十季をこつるトリに二百四十年ふらうこそ二百百千
才吉ふ母らうとらんをむあうーく解ーくささるんささるか
そ小治をの役區あり一説小曰上の八乃字執をの保りこ八の
字を除くべん九乃十季をこつるりく三十の男こら解を
すかとも老のり北六かと加翁の校合のなうたいうよさせるお遠
のちのきや八の一字を除くーとら解まらる解をうくー
亦一説曰そらうそ吉母の人をりあうりく八十季の將くさる
くりー八を薩八を垣八十氏の類こく人丸のなをり
まのの八十氏川る細代木ーりさうふ日のよう人あすすも

あかハ十八く叙のを年る八十季をこつるわらるは只吉母
の人ここのとらんくーとら一説あり亦一説曰八十年をこつる
こ七十この男かこつる七十をささる七十一ふち九八十のこら小ま
二つふらう七十こまうた八十の叙のちよ三年入るこま
ま八十季 トニうらうとらとらをささる八十季をこつるさ
かうーくこの好小作りらるこのくささる此の見神こらり
まののこ説りつれらるりれ好むあははあして取きと予い身
この説小を接す人ーの解吉母叙を誤りとらるささる下
しとま姫りしり九西施らもあまのりつれま女の叙こまを誤
ささるに壽らそあさの才一うたのいささるけさるあかのとれ
ま其あを新いさのらうたれとそれらやうもささる人のわら
まけを新あ本は九八十年をこつるさ活乃まといま

書ト拍子をりて付くるあ〜んを

焼乃ちあ子 賢ちる女 人〜く〜の 家 重五

け白い茶の油とりやに女のあはれあり〜 丈を賢ちるト
けり〜る茶乃ち香の〜りあ〜ん 秋風辞 蘭有秀兮菊
有芳 懷佳人兮不能忘矣か 原ふをいよを合せて 賢女とは
付くるト 付くるさち白茶の油を絞る家いさゆきあ〜んを
けりり此多々家は賢ちる女あり〜して 賢ちる多々焼乃ち討るに

拍瓶 小栗ををち〜りの〜に 荷兮

左の多々家の用を付く 栗はあ〜き 桶さ〜る〜と 拍瓶よハ
作り〜ん 前白の 賢女うま業あ〜んし

たやりのあ〜 梅子う〜る 正月り 杜國

けりめつ〜し〜きものを能く出〜して 付くる釜を桶さ〜は〜ふ

〜きを拍瓶小り〜やト 賢物の取〜し〜あ〜り〜るやり正月りめつ〜
し〜きものををん出〜し〜る〜と〜と 飾るものいぢり〜とあ〜んき
に 梅子ト 作り〜るあ〜り〜る〜 昔白のさあを女の業〜と〜ん〜たは
梅子子〜と 法孫り〜と 抱癒る麻痺のや〜と〜い 正月を
仕直〜して 移あ〜る〜 時〜る〜正月乃ちをやり〜と〜り 都
鄙〜と 小ア〜とあ〜る〜 昔〜と 正月乃ち 釈梳を〜と〜豆チ〜
美むる方せいの 腹筋を除く〜と 迎正月の〜やり〜と〜り けりり

は〜る〜み手向〜る 舟さよ 官 野水

左のやりの正月の 都鄙〜とよあ〜る〜と〜る〜と けりり
多くい田今〜る〜る〜と〜るやり正月 ねる〜る〜き〜と〜と
舟さよの官トハ けり〜んを 舟さよの 文真のあ〜り〜と〜り

むねふしのあやを画さうわー

心の侍門を押し乃 昏 芭蕉

さる齒乃ホのそふをさうわー 粧ひ飾るとさふり眼を
つけし侍所よ初まのそと付さう例さの後赤の美とさう
のもさふり龍威系うさうり林示さるく首をさるくさうく先初ま
乃ねまの以さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
代の例のさ後乃約乃後まゆ我君のさ先心の侍門よ心を
極陰りさく卑妙の者乃通入すさき門あはらさうさうさうさう
心を閉くの括りさうさう以押しさうと作りさう一陽さ後の
さうさう

さう薫うく扇さー風のサささみ 荷分

さう大内のさなうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

表の括れさうさうさう北の侍門さるさのさうさうさうさう
さうさうをさうさうさう掃除の体をけさうさうさうさうさうさうさう
さうの化粧さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

茶の湯者あーさう那さうさうさう 正平

掃除とさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうの料のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさう不浄さ掃除さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさう掃さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうたけさ物ささうさうさうさう 重五

けさうさうの茶人儒者のねさうさうさうさうさうさうさうさう
体をけさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

五形 莖乃 畠 六 及 杜國

左の山は莖乃の莖をよそしけりちの山は月小花子
ひくちる莖乃の莖過ちりきりもこの山は人
作九浦山よも一七者ちれも已う葉花小多くの田
も莖乃の莖一今いぬるも我りもんまきん
く五形すもれのも世を視る

ウレに啼く雲雀ちりくし 芭蕉

五形莖の莖抄あやうくの啼るるまを附けり

まの莖のころけねあやう月こ 野水

はるるにまのりのうらうらうらもや午よひも
あうく眠るる

おうもねや矢矧の橋乃ちりくま 杜國

東海を思ひの橋の扶桑才一の橋ゆりて長
く矢矧の橋のねりゆきを橋乃ちきと
矢作の山日本武尊東征時作矢奉之
味傳

唐の橋をよみく送りぬ 荷兮

ちののや外よりあ手も葉を眼して
んくけりりも葉化ありら
了年加えり或い嫁礼のねむりありて
壽をねりて送りく

橋の山は葉新くけりぬのひん 野水

くね思ひのけり他のくあねよも送り
アとて女子のものをいぬるあり

くろし時得るしかりを女のまゝくろしふみくろしひらくろし
まゝくろし人の傍りのまゝくろしまゝはくろしと持てくろしまゝ今
相をくろしくろし一木の松なりとありしくろし相をくろし
今にけす出りくろしつゝんと代のまゝくろしをくろしあはは
けく頻りよわりのまゝくろしくろしあははくろし成人なりはを
柴前もくろし延つゝんとくろしあははくろしまゝくろし
しくろし年七十三才なりんとくろしあははくろし文書はけりい
子の垣に子相くろしなりとありまゝくろしとくろしひらくろし
小所物くろしゆきせまのくろし松のくろし松のくろし乃
松をくろしきせまをくろし松の小所を持くろしとありけり松と
一字は解小使ありまゝくろし思ひ合せし人くろしき

二十日をとさむく刀 嘉慶年 重五

けり人の親の子をくろしあははくろし松のくろし子を持し
凡十二年も経ありまゝ今にけり子の我手小なりとあり
しくろし育てし人なりは刀をも持てし生をくろしを樂し
多しき中の心をくろしあははくろし松のくろし松のくろし
身いこしくろし松のくろし松のくろし松のくろし松のくろし
乃刀をくろし松のくろし松のくろし松のくろし松のくろし
くろし松のくろし松のくろし松のくろし松のくろし松のくろし
あし二十日とありまゝくろし松のくろし松のくろし松のくろし
くろし松のくろし松のくろし松のくろし松のくろし松のくろし
くろし松のくろし松のくろし松のくろし松のくろし松のくろし

雪乃狂果の國おらまゝりつゝくろし 荷兮
是の東坡杯の侍ゆしとあり松のくろし松のくろし松のくろし

三日月の赤い啼く鐘乃聲 芭蕉

乞伸し白中く芥子のあそくとさうり入おろしと併し諸
初と昔うたうらあそんけいすしりしとそ凡情さうく
ゆもこれまかうらあそん却く作らそそあそん赤を
啼くの詞力あり

秋風しほくきり琴うくまもの 野水

あふの鐘を二井寺とすうしそ岳芭桐を併しうね秋夜あふ
即ちそ秋の朧をすれは清風徐来水波不真飄々乎如遺
世と遠く赤壁の抱ひをそそあそんて彼ら客の洞蕭
を吹ひのあふ拍真まあそしりてあふれあそひのあそひ小琴や
あそんちりちりやいと振りあそんそそ忽僕とてそそあそ
かききりまを浮くとすきあそんそそ彼下僧子眼一統の場

あうらあそんあそん一語い真小乗しそ借しあそん借しあそ
あそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそん
あそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそん
あそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそん
あそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそん

あそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそん 杜國

あそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそん
あそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそん
あそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそん
あそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそん
あそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそん
あそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそん
あそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそん
あそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそん

あそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそん 荷兮

あそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそんあそん

酌とる亭 茶切り 野水

けり或人のほよきもちさき見足し月をさへらふおさるの言便り
ちりりよみふ体のんわいないなねおの酒さうさうさうさう
は解ちるさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
をちりりさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
と附さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
酒耐おさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

秋のさうさうの酒さうさうさうさうさうさう 芭蕉

さうさうさうの酒さうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
真一さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

おさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
おさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
備はさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

漸さうさうの酒さうさうさうさうさうさう 寺 荷兮

さうさうさうの酒さうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

寂さうさうの酒さうさうさうさうさうさう 杜國

さうさうさうの酒さうさうさうさうさうさうさう
一峰晴食隨鳴磬巢鳥下行踏空林落葉聲かさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

身を教へんことなほけけおとらふに格あてまけおつるのりく
菩薩のたのめなりきりく——行基菩薩のたよなりくとも山
乃まかりきけり又いしそとら母のこころありおたぬるふおしりきり
又母のまことりきり——紺のまかり

清幸ふらけむるのみらけり 重五

泥のく人の急ゆふりやうりなふら一将く川橋の清幸と付らる
白の泥とらふまき典葉頭たまを解きまけりまをまあるともゆる
ちりり

あしりての年の小角豆れ花まらし 野水

あしり水の清まらとらうり早魁とくそを付候を付らうり清思
ト夏日長愁民とらうり早魁とらうり早魁田家の幸善を情
こまら市幸とら付ら

まき子尼のちりり小炭園つくく 羽笠

まき子尼のちりり小炭園つくくは片測所の格とて
けりまき子尼のちりり小炭園つくくは片測所の格とて
まき子尼のちりり小炭園つくくは片測所の格とて

まき子尼のちりり小炭園つくく 荷兮

まき子尼のちりり小炭園つくくは片測所の格とて
まき子尼のちりり小炭園つくくは片測所の格とて
まき子尼のちりり小炭園つくくは片測所の格とて

あしりての年の小角豆れ花まらし 芭蕉

あしり水の清まらとらうり早魁とくそを付候を付らうり清思
あしり水の清まらとらうり早魁とくそを付候を付らうり清思

七の手あふ折るりて弄あきかちるる

志何 志に飯妻ののそく月の前 重

あふ妻とそりり寺に付らりさそくは時のさなを飯妻の
そくと作りさちありらり詩は深林人不知明月来相
照るさそひ出さるる寂寥の体らりつひけり

志何 志にきりつひの酒やうらるる 杜國

志らりさそくしりあうり狐鳴るさ附て月のちくとりあはれさ
の体を風わうりさそくしりあうりさそくしりあうり一字不傷なり
んんん

泊柿よ居根あうれさ片鹿 羽笠

あうちく狐とらうり山家の体を附らり泊柿よ居根あうり
ふささ家ののそりさそくあうりわらりをさるる

巨眉はけりりり母の喪ふ入 野水

あは起性の付とあひの俤ささ体を喪ふさそくしりあうり
喪親者居倚廬賤者居聖室 宰我問三年之喪期已
久矣子曰夫君子之居喪食不甘聞樂不樂居所不
安三年之喪天下通喪也 右論語取意 山濤居母喪
負土成墳手植松柏

えん政の孝乃杖と破れらるる 芭蕉

あひ母の喪ふ入とそりり孝人の人をんあしてえん政と付ら
りりりえん政に塞乃母を扇あて涼ささりり甲州身延山に
訪あてらる孝人の人をん喪ふありり居て悲歎の落後小杖
と破れらるる孝人の人をん喪ふありり居て悲歎の落後小杖
字を時あつ

伏見本情の續も所を〜 荷兮

伏見あり〜 伏見のえ改り枝の汲り破れ伏見
 ち〜 この花の鐘の〜 伏見の〜 この〜 対〜 なる二のまゝ
 さ〜 曲節〜 伏見の〜 曲を〜 伏見の〜
 い〜 伏見の〜 伏見の〜 伏見の〜
 なる鐘も〜 伏見の〜 伏見の〜
 なる〜 伏見の〜 伏見の〜
 つ〜 伏見の〜 伏見の〜
 出〜 伏見の〜 伏見の〜
 なる〜 伏見の〜 伏見の〜

昔の志〜 重五

猫持〜 のり〜 猫を〜 人を〜 婦女
 難ひ〜 伏見の〜 伏見の〜
 猪の性〜 伏見の〜 伏見の〜
 一白の熱〜 伏見の〜 伏見の〜
 せ〜 伏見の〜 伏見の〜

水干を秀白の髪わ〜 野水

け〜 水干の〜 水干の〜
 さ〜 秀白の〜 秀白の〜
 妻の〜 秀白の〜 秀白の〜
 け〜 秀白の〜 秀白の〜
 う〜 秀白の〜 秀白の〜
 め〜 秀白の〜 秀白の〜

とりよる理なくんや後人まると考ふべし

山ノ茶も白く自らまのこころし 羽笠

け茶白もその口一部の茶白とありて根の葉の山茶も白
を白くせしむるのありしとて作りしものこ白くは
白の所乃脱捨するを望まざらん

追加

いづれも人ごとくはましく牛をうけまぬ 羽笠

け茶白の牛の純さよりの小茶敷の如く一きを越向して作り
しうて電者砲也中物如砲也とてうけもたけしきり茶
の本性もわらうらん一いつよんよよ小茶敷も納わりのよし
る牛小茶敷の所を及ちまをこころしとて一茶うて一報りてうら

抑して責えたるをうらしてうけられんよまのい
しるんよとておしとてまをとりしむるらん一とたれつてはま
うらとてうらつての茶をさ小茶敷仁情函に納りてうらえにまを
の現れをもとむべき

移れし小茶敷のこころしとて一茶うて 荷兮

け茶白牛退ふ木のこととて茶を茶うてまをうらりの茶をまをまを
作をうて根とてうらしてうらして牛の茶をまをまを
まの茶をまをまを價とて茶を茶の焚火して茶風をまを
まをうて世人の茶を茶を減らちらんうらうの茶は
まの茶うらしてうらして茶をまをまを

とくさ 川下もまを茶を茶せんて 重五

け茶白もまをうらして茶下もまを茶を茶せんて

蕉門俳諧書林

京三条通寺町西江入

菊舎太兵衛

三十一

